

王 大 伝統の手技

第十七回

職人の「職」という字は、
耳で音を聞くとという字だ。
音で職人の腕がわかるんだよ。
染めに心血を注ぐ
職人・高橋欣也さんの気概だ。

江戸文化保存会「気楽連」の世話人を務める高橋さんは、会の名に恥じない江戸職人の雰囲気を感じ出す。本人そのものが「江戸の粋」を体現しているのだ。

文/山川敦司 撮影/荻谷真紀



半纏の裏地に描かれた鯉の図柄。「相手を圧倒するものを表に出すのはヤボ」という江戸っ子の心意気が反映されている。

物づくりは
使う人の心が
わかなくちやいけな
い。

「えっ、〇に鎌、だから『おかま』じゃないかって。わかんないかねえ」（合財袋の写真参照）
そんな判じ物の問答から始まった取材だったが、答は――、「『かまわぬ』。これは、団十郎の紋様だね。『ぬ』のかわりに『升』を入れたら『かまいます』になる。ん？ 難しかったって。じゃ、これならわかるだろ？」

足の長い骸骨が腰を下ろして、たばこを一服……。うーん……？ これで、「骨休め」と読むのどか。

「今の若い人たちにゃあ、難しいのかねえ。説明してやるんだけど、シヤレを絵解きするなんて、ほんとシヤレにもならねえ」

粋な喧嘩被りに印半纏。まるで時代劇のワンシーンから抜け出してきたかのような出で立ちで苦笑いするのが、東京・日本橋浜町の染元「濱野高虎」二代目、高橋欣也さんだ。

江戸時代には各藩の蔵屋敷が立ち並び、職人の町として栄えた日本橋浜町。そんな下町情緒を残す町で同店は、昭和23年から染元の看板を掲げてきた。高橋家は代々、「紺屋」を営んでいたが、六代目で系譜が途



江戸の洒落が描かれた合財袋。左から「たまげた」（玉の上に下駄）、「骨休め」（骸骨の服）、「かまわぬ」（輪の中に鎌とぬ、の字）。図案のアイデアは、歌舞伎や落語を参考にすることが多い。

切れているため、「正直、あたしが何代目なのかはわかんないんだね。ただ、町人は三代以上続かないと恥なんって言われるけど、あたしら職人は逆に、三代続くと恥」と言われてね。要は血筋の中で仕事を続けるのは、江戸っ子にとって粋じゃなかったんだな」
女ばかりの五人兄弟で唯一の男だった高橋さんが、この世界へ飛び込んだのは中学を卒業しすぐのこと。
「職人には学問なんかいらねえ」という親父で、二言目には大学出たやつらはダメだ、と。松下幸之助は小学校出ただけで、あんなに偉くなったんだ。おまえは中学出てるんだから、凄えんだぞ、って。そのくせ、これからの女は女学校ぐらい出

てなくちやいけねえってね。ほんと、訳がわかかんねえ（笑）」

◆ 染元とは、問屋から注文を受けデザインを決めたのち、工程の段階別に職人に仕事を依頼。仕上げまでの責任を負って納品する、いわば染め製品の総合プロデューサーだが、

「親父の頃は大半が呉服の注文で、半纏や小物なんてえのは付け足したいなもんだったんだね。ところがあたしの代になると、それが逆転しちゃった。で、今は小物が主力商品になった。なかなか昔の看板だけじゃ勝負

できない時代になったねえ」
店で扱うのはオーダーメイドの半纏のほか、手拭い、合財袋、掛守かけまもりといった小物など。そんな商品一つひとつに潜めひそられているのが江戸の洒落だ。「当時は字の読める人が、まあ

少なかったから、こうやって染しんだ。えっ、深い意味はあるのかって？ そんなこと聞くのは、ま、つまりアレだな」

と、高橋さんが指さす先には、菊を模ったTシャツがぶら下がっていたのだ。……（聞くだけ野暮の意）。

職人は、三代続くと恥。
仕事を血筋でやるのは粋じゃない
ってのが江戸っ子だ。

とら屋虎丸



印半纏に喧嘩被りで、いなせ、な出で立ちの高橋欣也さん。

喧嘩被りの手順



①手拭いを頭に
乗せて、両端を
引っ張り、両端
を捻っていく。



②中心がズレな
いよう、下に引っ
張りながらくるく
ると捻って、絞る
ようにする。



③中心を包むよう
に巻き込んだら、
後頭部のやや上
で交差させる。



④そのまま両端
を引っ掛けて引っ
張る。



⑤引っ掛けた部
分を内側に入れ
込んで完成。



「喧嘩被り」は、頭に手拭いをきつく巻くため目尻
が引っ張られ、キツネ顔になるが、高橋さんいわく
「これが江戸っ子本来の顔」なんだそう。



「50年以上やっても、まだまだダメだね。生涯勉強だよ」と謙遜する高橋さん。

高橋欣也

Takahashi Kinuya

1937(昭和12)年、墨田区本所で女兄弟ばかりの一人息子として生まれる。高橋家の先祖は房総半島から渡ってきた紺屋(江戸時代の染物屋)だが、六代目で系譜が途切れているため、「正式には何代目だかはわからない」という。1949(昭和24)年、地元を卒業したのち、15歳で呉服屋に修業に入る。3年後には父が営む「染元」に戻り、修業を積みながら、以来この道一筋50数年。「半纏は着て動いてはじめてわかる!」という信念のもと、関東一円をはじめ、各地の祭りを回って自ら神輿を担ぎ、山車を引いて「さらには地元の人たちと一杯やりながら」デザインのイメージを膨らませてきた。「職人は三代続く」と江戸っ子の恥という考えから、世襲制をとらず後継者には弟子を抜擢。江戸文化に造詣が深く、現在、江戸文化保存会『気楽連』世話人を務める傍ら、「写絡才金坊」(しゃらくせいさんぼう)の画号で版画や千社札も描く、粋な江戸っ子である。

高虎商店：東京都中央区日本橋浜町2-45-6
TEL：03-3666-5562

「粋」と「野暮」とは裏表。
やり方ひとつでどっちにも転ぶ。

今年の干支である卯が描かれた「鳥獣戯画」の手拭い。



この手拭いの骸骨も一服している
ので「骨休め」と名付けられた。とに
かく洒落のめすのだ。

豆紋り(下側)と水玉模様
(上側)の手拭い。



江戸の瓦版屋が被っていた
吉原被り。



江戸時代には手拭い一本で、
こんなに多くの縛り方があった。

掛守の染め方



③出来上がった掛守。タイトルは「家においでよ」だそう。
「Come on」→「カモン」→「かもん」→「家紋」ということ。



②生地凹凸があるため、塗って染める
のではなく、筆で叩いて色を埋めていく。



①型紙を彫った後、糊を置き、絵柄を染め
ていく(写真は掛守)。

「何でもそうだけど、物づくりは、使う人たちの心がわからないといけない。だから机に向かっているだけじゃだめ。外に出てどんな遊ばないとね。えっ、そうは言うけど遊び過ぎだつて? 野暮言うねえ(笑)」

出で立ちだけでなく、「頭のテッペンからつま先まで」まるで江戸時代からタイムスリップしてきたかのような高橋さんだが、実は昨年、体調を崩したこともあり、最近は酒席もめつきり減ったとのこと。

「それでも、飲みたくなれば、ふらっと出掛けるよ。ただ、量は飲まなくなったなあ。昔から

着て、動いてみる。そして、大勢の中に立ったときに光って見えるかどうか。それが高橋さんのこだわりだ。

「何でもそうだけど、物づくりは、使う人たちの心がわからないといけない。だから机に向かっているだけじゃだめ。外に出てどんな遊ばないとね。えっ、そうは言うけど遊び過ぎだつて? 野暮言うねえ(笑)」

出で立ちだけでなく、「頭のテッペンからつま先まで」まるで江戸時代からタイムスリップしてきたかのような高橋さんだが、実は昨年、体調を崩したこともあり、最近は酒席もめつきり減ったとのこと。

「それでも、飲みたくなれば、ふらっと出掛けるよ。ただ、量は飲まなくなったなあ。昔から

「野暮」との違いをご存じだろうか。「野暮」は、言わずもがなの「粋」で対義語。だから反対を意味する。そのため、「垢抜け、遊び慣れ、後を引かない、江戸っ子氣質」が粋とされる一方「野暮」のほうは「融通が利かない、場を弁えない、田舎っぽい、スツキリとしない」と、そのイメージは散々だ。

だが、実は「江戸っ子の粋」を代表する半纏も、着こなし次第では「ありゃ、野暮だねえ」となる危険があるのだとか。

「たとえば、浅草と深川の祭りとかじゃ、神輿のスピードが違うわけ。浅草はゆっくりだけど、深川は速い。なぜって浅草のほが回る距離が長いからね。だから、深川の祭りじゃ、丈が長い半纏を着たらだらしがねえ。途中で水がぶつかかるから、尻切れといって尻が少し出るくらいの半纏で威勢よくダッシュと行く。それが粋なんだな。ところが、粋だつてんで、浅草の神輿を尻切れ半纏で担いだら、今度は腰の線が合わなくて野暮になっちゃう。その辺が難しい」

つまり、祭りにはそれぞれ特

徴があり、そこを理解しなければピッタリ合う半纏は作れないというわけだ。そこで高橋さん、実際に神輿を担ぎ、山車を引いて回った。

「昔は祭りの時期になると、それこそ、今日は盛岡、明日は福島と、あちこちを渡り歩いた。フーテンの寅さんみたくだったな。周りから『お前はいつ仕事してるんだ!』って言われたけど、そこへ行って遊んで、神輿担いで一緒に酒を飲んでみる。すると相手の思っていることが見えてくるから、注文が来てもどんなものを作ればいいかピンとくる。あたしは職人は、芸術家じゃないからね。相手の気に入ったものを作って初めておカネをいただく。そこを間違っちゃいけないんだ」

ねぶた祭りでは着る半纏の注文を受けたときのことだ。

「普通は、ねぶただからデザインも派手に派手になるとなるんだろうけどね、あたしはあえて地味に作った。すると逆に一番目立ってねえ、あんどきは喜ばれたなあ」

見た目だけではなく、実際に

「普通は、ねぶただからデザインも派手に派手になるとなるんだろうけどね、あたしはあえて地味に作った。すると逆に一番目立ってねえ、あんどきは喜ばれたなあ」

見た目だけではなく、実際に

「普通は、ねぶただからデザインも派手に派手になるとなるんだろうけどね、あたしはあえて地味に作った。すると逆に一番目立ってねえ、あんどきは喜ばれたなあ」

見た目だけではなく、実際に

「普通は、ねぶただからデザインも派手に派手になるとなるんだろうけどね、あたしはあえて地味に作った。すると逆に一番目立ってねえ、あんどきは喜ばれたなあ」

見た目だけではなく、実際に

「普通は、ねぶただからデザインも派手に派手になるとなるんだろうけどね、あたしはあえて地味に作った。すると逆に一番目立ってねえ、あんどきは喜ばれたなあ」

見た目だけではなく、実際に

「普通は、ねぶただからデザインも派手に派手になるとなるんだろうけどね、あたしはあえて地味に作った。すると逆に一番目立ってねえ、あんどきは喜ばれたなあ」

見た目だけではなく、実際に

「普通は、ねぶただからデザインも派手に派手になるとなるんだろうけどね、あたしはあえて地味に作った。すると逆に一番目立ってねえ、あんどきは喜ばれたなあ」

見た目だけではなく、実際に